

千葉市地蔵作遺跡（第2次）

2024

株式会社AHC
千葉市教育委員会
株式会社東京航業研究所

千葉市地蔵作遺跡（第2次）

－店舗建設に伴う発掘調査報告書－

2024

株式会社AHC
千葉市教育委員会
株式会社東京航業研究所

千葉市地蔵作遺跡（第2次）

－ 店舗建設に伴う発掘調査報告書 －

2024

株 式 会 社 A H C
千 葉 市 教 育 委 員 会
株 式 会 社 東 京 航 業 研 究 所

例 言

1. 本書は、千葉県千葉市花見川区長作町 959-1 他に所在する地蔵作遺跡（第2次）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、千葉市教育委員会が主体となり、株式会社 AHC からの委託を受けた株式会社東京航業研究所が支援を行った。
3. 発掘調査の期間と組織は、以下の通りである。
発掘調査 令和5年8月28日～令和5年9月29日
調査主体 千葉市教育委員会
調査担当 白根義久・木口裕史（千葉市埋蔵文化財調査センター）
調査支援 坂下貴則（株式会社東京航業研究所）
測量支援 大久保聡 小林洸太郎 鈴木智之 島本大輝（株式会社東京航業研究所）
4. 遺物整理及び報告書の作成は、千葉市埋蔵文化財調査センターの指導に基づき、株式会社東京航業研究所が令和5年9月30日から令和6年5月31日まで行った。
5. 本書の執筆は、第1章第1節を千葉市埋蔵文化財調査センター、それ以外を坂下貴則が行った。遺物観察表は縄文土器・土器・磁器を岩本多恵子が、石製品・土製品を竹内あいが執筆した。
6. 本書の編集は、坂下貴則（株式会社東京航業研究所）が行った。
7. 本書に関わる出土遺物などの諸資料は、千葉市埋蔵文化財調査センターが管理・保管する。

凡 例

1. 遺跡におけるX・Y数値は、世界測地系による国土標準平面直角座標第IX系に基づく座標値を示す。
また、各挿図に記した方位はすべて座標北である。
2. 調査に際して使用したグリッドは、2×2mの範囲を基本とし、北西の原点から、事業地内の全体を覆うように設定した。グリッドの名称は、北から南方向にアルファベット（A→K）、西から東方向に数字（1→26）を付し、アルファベットと数字の組み合わせで呼称した。
3. 遺構の略号は、以下の通りである。
溝跡：SD 土坑：SK ビット：P
4. 遺構・遺物実測図の縮尺は、図中に適宜縮尺とスケールを示した。
5. 遺構図の表記方法は、以下の通りである。
——攪乱線
6. 遺物観察表の表記方法は、以下の通りである。
 - ・計測値の（ ）内の数値は推定値、〈 〉内の数値は残存値を示した。
 - ・計測値の単位はcmである。

目次

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査・報告書作成の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理・報告書作成	2
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 立地	3
第2節 地理的・歴史的環境	3
第3章 遺跡の概要	5
第4章 遺構と遺物	7
第1節 土坑	7
第2節 ビット	8
第3節 溝跡	8
第4節 遺構外出土遺物	12
第5章 まとめ	13
写真図版	
報告書抄録	
奥付	

挿図目次

第1図	地蔵作遺跡の位置	1	第7図	第1号溝跡(2)	10
第2図	花見川流域周辺の主要遺跡	4	第8図	第1号溝跡出土遺物	11
第3図	地蔵作遺跡(第2次)全体図	6	第9図	遺構外出土遺物	12
第4図	基本層序	7	第10図	土坑が平面数珠状に連なる溝跡	14
第5図	土坑・ビット	8	第11図	遺構変遷図	15
第6図	第1号溝跡(1)	9			

表目次

表-1	花見川流域周辺の主要遺跡一覧表	4	表-3	第1号溝跡出土遺物観察表	11
表-2	調査地点の概要	5	表-4	遺構外出土遺物観察表	12

写真図版目次

図版1	遺跡遠景(東から)、遺跡全景(南から)
図版2	A区全景(南から)、A区遺構確認状況(南から)
図版3	SK1(東から)、SK1断面(西から)、SK2(東から)、SK2断面(西から)、SK3(東から)、SK3(西から)断面、P1(東から)、P1断面(東から)
図版4	B区全景(南から)、B区遺構確認状況(南から)
図版5	SD1遺構確認状況(1)(東から)、SD1遺構確認状況(2)(東から)
図版6	SD1-SK1断面(東から)、SD1-SK2断面(東から)、SD1-SK3断面(西から)
図版7	出土遺物

第1章 発掘調査の概要

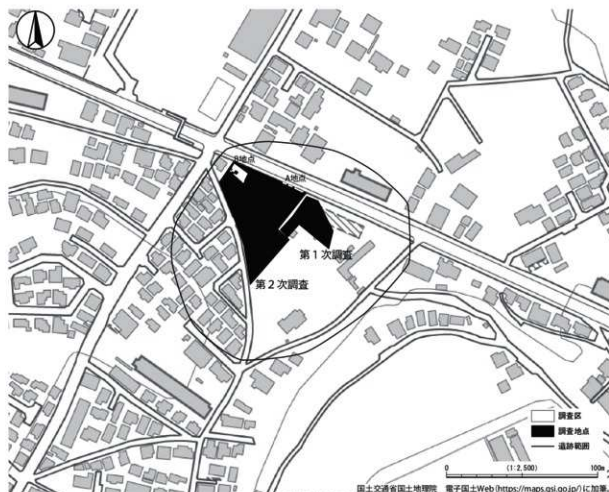
第1節 調査に至る経緯

令和4年7月7日付けで、個人より店舗建築に掛かる埋蔵文化財保護法第93条に基づく届出が提出された。試掘調査では、平成7年度に東側隣接地で行われたガソリンスタンド建設時の本調査で調査された溝状遺構が本事業地に延びている状況が確認されたため、令和5年7月22日付け「4千教理セ第177号」にて工事着手前に確認調査を実施するよう通知した。

確認調査は令和4年8月31日から同年9月14日の期間で実施され、縄文時代の竪穴住居跡1軒、土坑1基、中世から近世にかけてと思われる溝状遺構1基が確認された。これによって、事業範囲2043㎡の内、900㎡が本調査対象範囲とされた。

その後の調整により、店舗部分、排水溝および看板設置箇所の102㎡のみ本調査を実施し、他の本調査対象範囲については盛土の上、駐車場とし、現状保存することとなった。

令和5年8月21日、店舗建築を行う株式会社AHCより発掘調査依頼が提出され、千葉市教育委員会が主体者となり、事業者からの委託を受けた株式会社東京航業研究所の支援のもと、令和5年8月22日から令和5年9月29日まで発掘調査を実施した。



第1図 地蔵作遺跡の位置

第2節 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

地蔵作遺跡（第2次）の発掘調査は、店舗建設に伴い実施した。調査面積は102㎡である。調査期間は、令和5年8月28日から9月29日までである。

8月28日に調査区を設定し、29・30日に重機による表土掘削を行った。プレハブ設置・機材搬入の上、9月5日に基準点測量とグリッド設定を行い、補助員を入れ、発掘調査を開始した。

調査区はA・B両調査区に分かれ、A区で土坑・ピット、B区で溝跡を検出した。試掘調査の結果から深く掘削されたと想定される溝跡については、確認面からさらに約20cm掘り下げて遺構の輪郭を明確にした上で、効果的な土層断面図の作成位置を決定した。B区の溝跡からA区の土坑・ピットへと順次精査を進め、土層断面図・平面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。

9月22日までに概ね全体を完掘し、清掃の上、9月25日に空中写真を撮影した。その後、機材の撤去、プレハブ撤去、調査区の埋め戻しを行って、9月29日に調査を完了した。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、令和5年9月30日から令和6年5月31日まで実施した。出土遺物はコンテナ1箱分である。

発掘調査で記録した遺構の平面図や断面図はパソコンに取り込み、画像編集ソフトで遺構ごとにトレースした上で修正を加え、遺構の第二原図を作成した。また、第二原図に土層説明などを組み込み印刷用の版下を作成した。発掘調査で撮影した遺構写真は、整理・選択して写真図版用の版下データを作成した。

出土遺物は、水洗・注記（「R5 ジソウサク」）し、接合関係を確認したのち、報告書掲載遺物を抽出した。抽出した遺物は実測・トレース・拓本採取を行った。これらの原図はパソコンに取り込み、印刷用の挿図を作成した。また、写真図版用の遺物写真を撮影し、版下データを編集・作成した。

令和6年2月から、作成した遺構・遺物のデータをもとに原稿執筆を開始した。執筆した原稿と、遺構・遺物の挿図・表・写真図版などを組み合わせて報告書の割付・編集を行い、5月に原稿を印刷業者に入稿・校正を経て刊行した。また、これに併せて、発掘調査の出土遺物と記録類は、整理・分類の上、千葉市埋蔵文化財調査センターに収納した。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 立地

千葉市は東京湾に面し、房総半島の付け根に位置する。地形的には、利根川を挟んで茨城県南部の常陸台地と対峙する下総台地と、東京湾に沿って帯状に発達した低地とに大別され、ここを北から花見川・都川・村田川の主要3河川が西流する。

下総台地は、新生代第四紀に形成された洪積台地である。台地先端部は小河川によって樹枝状に開析された舌状台地が発達しており、支谷に湧水点がみられることから原始・古代から集落・畑地が展開した。

一方、砂洲・自然堤防・沖積平野からなる低地は、水田経営に適しており、入江も発達していることから、江戸時代は養殖や沿岸漁業も盛んに行われていた。

地蔵作遺跡は、千葉市北部の習志野市境に近い花見川区長作町959-1他に所在する。遺跡は、京成電鉄本線実務駅の南東約0.6kmに位置し、南北約110m、東西約120mの範囲に広がっている。標高は約23～24mである。

第2節 地理的・歴史的環境

地蔵作遺跡は、花見川本谷と浜田川谷に挟まれた舌状台地の付け根に立地する。花見川は、江戸時代から幾度かの開削工事を経て、昭和30年代に開通した印旛沼からの放水路（印旛放水路）である。この河川流域では、これまで旧石器時代～近世の遺跡が調査され、地域の遺跡の様相が明らかになってきた。

旧石器時代の遺跡は僅かである。箕輪遺跡や子と清水遺跡でナイフ形石器、玄蕃所遺跡で細石刃を伴う石器群がそれぞれ検出されている。

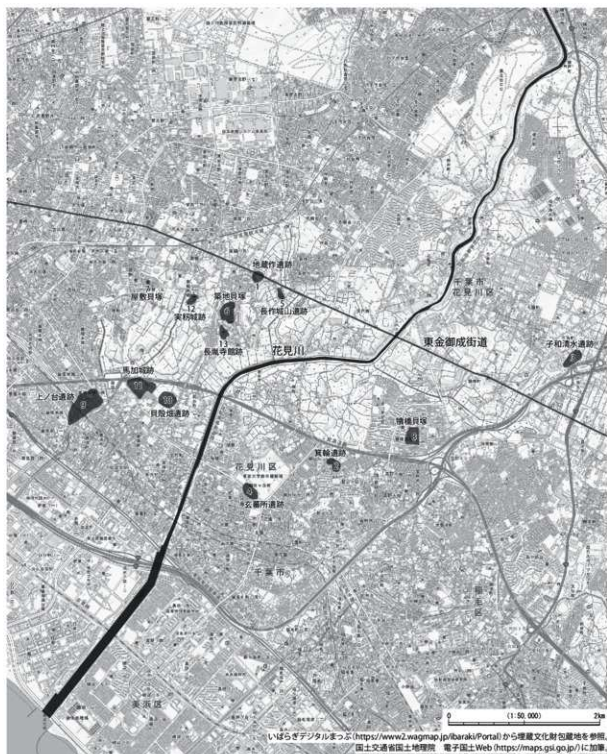
縄文時代は、早・前期は長作城山遺跡などの充実した遺跡群が認められる。中期は大規模な集落が展開せず都川・村田川に比べ集落の密度が低い。後期になると、東京湾沿岸一帯に形成された馬蹄形貝塚である、築地貝塚、習志野市屋敷貝塚、国指定史跡・猿橋貝塚が形成される。晩期から弥生時代になると遺跡は減少する。

古墳時代でも中期まで集落は少ない。後期になると、集落のほぼ全域が調査された上ノ台遺跡が知られている。約300軒の竪穴住居跡が検出され、埼玉県北部から群馬県平野部に分布の中心がある有段勾線の環や甕が多く出土している。

奈良・平安時代になると、さらに遺跡数は増加する。「至」「富」「八十」などと記された墨書土器41点が出土し、掘立柱建物跡の規模からも、この地域の拠点的な集落と考えられる貝殻遺跡などがある。

中世では、馬加城跡、実務城跡、長風寺館跡など、現在も堀や土塁と思われる痕跡が残る千葉氏に関わる城館が築かれた。

近世では、江戸の防衛ライン構築に関係した軍事道路とも考えられる船橋から東金に直線状に通じる東金御成街道がある。この道は現在も千葉県道69号長沼船橋線として利用され、その南脇に地蔵作遺跡が位置している。



第2図 花見川流域周辺の主要遺跡

表一 花見川流域周辺の主要遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	地藏作遺跡	8	檜橋貝塚
2	箕輪遺跡	9	上ノ台遺跡
3	子和清水遺跡	10	貝塚遺跡
4	玄蕃所遺跡	11	馬加城跡
5	長作城山遺跡	12	実綱城跡
6	築地貝塚	13	長風寺館跡
7	屋敷貝塚		

第3章 遺跡の概要

地蔵作遺跡は、これまでに本書を含む2次にわたる発掘調査が、千葉市教育委員会によって実施されている。具体的には、1996年のガソリンスタンド建設に伴う第1次調査と、2023年の店舗建設に伴う第2次調査である。これらの調査によって、縄文時代と近世の遺構と遺物が出土している。

ここでは、各調査単位の概要をまとめておきたい。

第1次調査

ガソリンスタンド建設に伴う発掘調査として実施された。調査面積は630㎡である。現地表下約0.4mの立川ローム層を遺構確認面としている。標高は23.9～24.1mである。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡4軒・土坑6基と、近世の溝跡1条である。縄文時代の竪穴住居跡は、いずれも縄文時代中期中葉（加曾利EⅡ式）である。1～3号住居跡で土器片錡が出土し、2号住居跡で貝殻密集地点が検出されている。貝類は浅瀬の砂泥に生息する種類であり、漁撈は遺跡周辺の入江や干潟、沿岸部で行われたと推測されている。

近世の溝跡は、土坑が平面数珠状に連なり、北西から南東に走る。溝跡内に連続して掘削されていた土坑は2基である。各土坑の平面形態は類似しており、上面楕円形で、下面長方形である。下総台地に展開した幕府官営の牧に準じる野馬堀ではないかと推測されている。

第2次調査

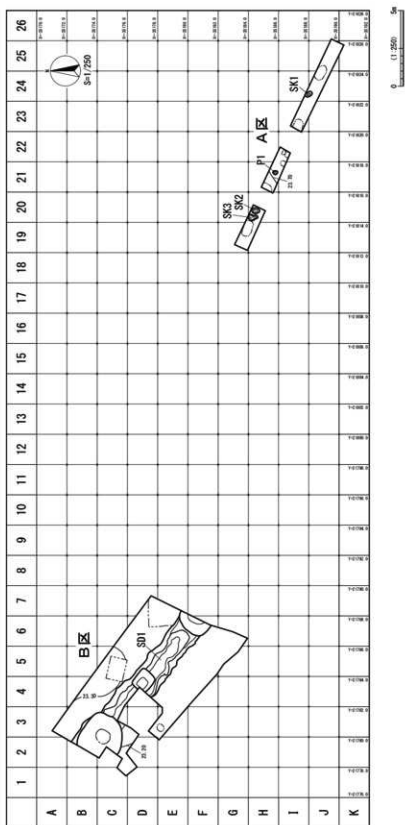
店舗建設に伴う発掘調査として実施した。調査面積は102㎡である。現地表下約0.4～0.5mの立川ローム層を遺構確認面とした。標高は約23.2～23.8mである。本地点はA・B両調査区に分かれる。A区東側の隣接地が第1次調査地点であり、第2次調査の成果は、これに連続する遺構と遺物の広がりと考えられる。

検出した遺構は、縄文時代の土坑3基・ピット1基と、近世の溝跡1条である。縄文時代の土坑・ピットは、出土遺物がないものの、覆土や、A区東側に隣接する第1次調査の出土状況から、これらに続く集落の広がり と判断した。

近世の溝跡は、土坑が平面数珠状に連なり、北西から南東に走る。溝跡内に連続して掘削されていた土坑は3基である。各土坑の平面形態には円形と方形がある。このような溝跡は、第1次調査でも検出され、野馬堀と推定されている。第2次調査で検出した遺構も、これに続く遺構の一部であろう。

表-2 調査地点の概要

調査地点	調査面積㎡	縄文	近世	特記事項	発掘	文献
第1次調査	630	竪穴住居跡4 土坑6	溝跡1	・縄文時代中期中葉 (加曾利EⅡ式) ・近世平面数珠状溝跡	1996	図1編 1997
第2次調査	102	土坑3 ピット1	溝跡1	・近世平面数珠状溝跡	2023	本書



第3図 地蔵作遺跡（第2次）全体図

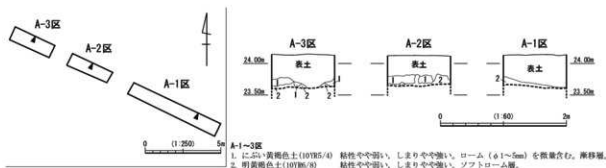
第4章 遺構と遺物

地蔵作遺跡(第2次)の調査区はA・Bに分かれる。遺構確認面までの土層の堆積は、A区で確認した(第4図)。現地表面から約0.4～0.5mで立川ローム層を検出し、これを遺構確認面とした。表土から遺構確認面までは2層が堆積する。1層はにぶい黄褐色土で、ローム層への漸移層である。2層は明黄褐色土で、ソフトローム層である。

遺構は、A区で土坑3基・ピット1基、B区で土坑が平面数珠状に連なる溝跡1条を検出した。

A区の土坑・ピットからは遺物が出土しなかったものの、覆土の状況や、隣接する第1次調査区から縄文時代中期中葉(加曾利EⅡ式)の竪穴住居跡が出土していることから、縄文時代の遺構の広がりと考えられる。

B区の溝跡からは近世の陶磁器、土製品、石製品などが出土した。



第4図 基本層序

第1節 土坑

第1号土坑

I・J-24グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は楕円形で、規模は長軸0.50m、短軸0.30m、深さ0.17mである。覆土は2層で、暗褐色土を基調とする。

出土遺物はない。時期は不明であるが、覆土の状況や、隣接する第1次調査地点から縄文時代中期中葉(加曾利EⅡ式)の遺構が出土していることから、同時期の遺構の広がりと考えておきたい。

第2号土坑

H-20グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は楕円形で、規模は長軸0.53m、短軸0.37m、深さ0.20mである。覆土は2層で、暗褐色土を基調とする。

出土遺物はない。時期は不明であるが、覆土の状況や、隣接する第1次調査地点から縄文時代中期中葉(加曾利EⅡ式)の遺構が出土していることから、同時期の遺構の広がりと考えておきたい。

第3号土坑

H-20グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は弧線形で、規模は長軸0.64m、短軸0.43m、深さ0.20mである。覆土は2層で、暗褐色土を基調とする。

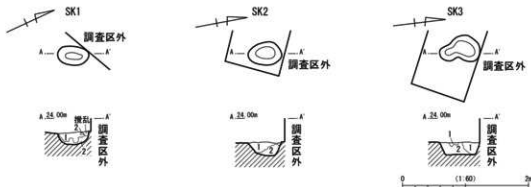
出土遺物はない。時期は不明であるが、覆土の状況や、隣接する第1次調査地点から縄文時代中期中葉(加曾利EⅡ式)の遺構が出土していることから、同時期の遺構の広がりと考えておきたい。

第2節 ビット

第1号ビット

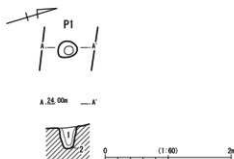
H-21 グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は楕円形で、規模は長軸 0.30m、短軸 0.25m、深さ 0.35m である。覆土は2層で、暗褐色土を基調とする。

出土遺物はない。時期は不明であるが、覆土の状況や、隣接する第1次調査地点から縄文時代中期中葉(加曽利EⅡ式)の遺構が出土していることから、同時期の遺構の広がりと考えておきたい。



SK1、SK2、SK3

1. 暗褐色土(10TR3/4) 粘性やや強い、しまりやや強い、ローム(φ1~5mm)を微量含む。
2. 黄褐色土(10TR5/6) 粘性やや強い、しまり強い。



P1

1. 暗褐色土(10TR3/4) 粘性やや強い、しまりやや強い、ローム(φ1~5mm)を微量含む。
2. 黄褐色土(10TR5/6) 粘性やや強い、しまり強い。

第5図 土坑・ビット

第3節 溝跡

第1号溝跡

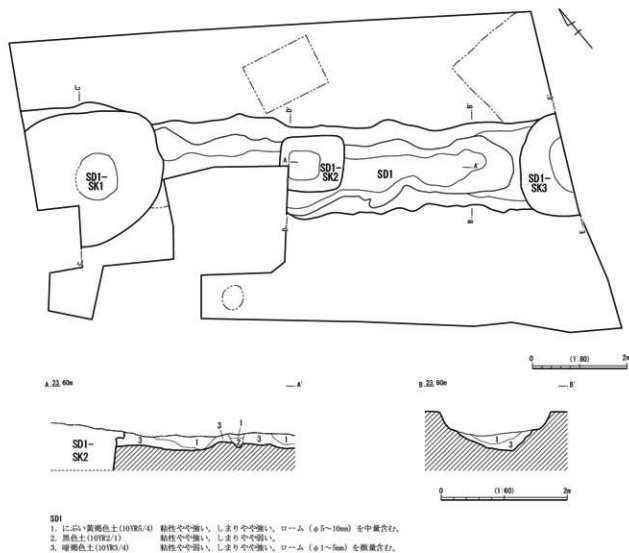
B~F-2~7グリッドに位置する。重複する遺構はない。土坑が平面数珠状に連なる溝跡で、北西から南東に延びる。規模は長さ 11.34m 以上、幅 1.83m、深さ 0.32m である。走行方位は N-52°-W である。覆土は3層で、暗褐色土を基調とする。

SD1-SK1は、平面円形である。規模は、長軸 3.06m、短軸 2.94m 以上、深さ 2.96m である。覆土は3層で、暗褐色土を基調とする。最下層の3層はロームブロックを多く含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

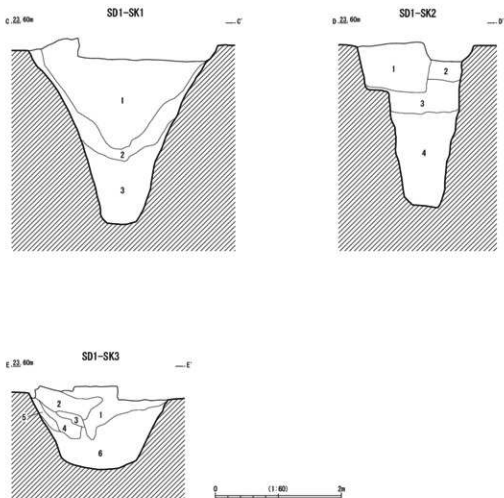
SD1-SK2は、平面方形である。規模は、長軸 1.34m、短軸 1.21m、深さ 2.63m である。覆土は4層で、暗褐色土を基調とする。最下層の4層はロームブロックを多く含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

SD1-SK3は、平面円形である。規模は、長軸2.16m、短軸0.99m以上、深さ1.32mである。覆土は6層で、黄褐色土を基調とする。最下層の6層はロームブロックを多く含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物は僅かである。1は肥前系磁器の五寸皿である。2は焙烙である。3は石臼で、下白か燻白である。底面から遺物が出土しておらず、時期は明確でないが、近世のものであろう。



第6図 第1号溝跡(1)



SD1-SK1

1. 黒褐色土(10YR3/1)
2. 暗褐色土(10YR3/3)
3. 暗褐色土(10YR3/3)

粘性やや弱い、しまりやや強い、ローム(φ1~5mm)を微量含む。
 粘性弱い、しまりやや弱い、ローム(φ1~10mm)を少量含む。
 粘性弱い、しまりやや弱い、ローム(φ1~10mm)を中量含む

SD1-SK2

1. 灰白色砂(10YR8/1)
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4)
3. 褐色土(10YR4/6)
4. 暗褐色土(10YR3/4)

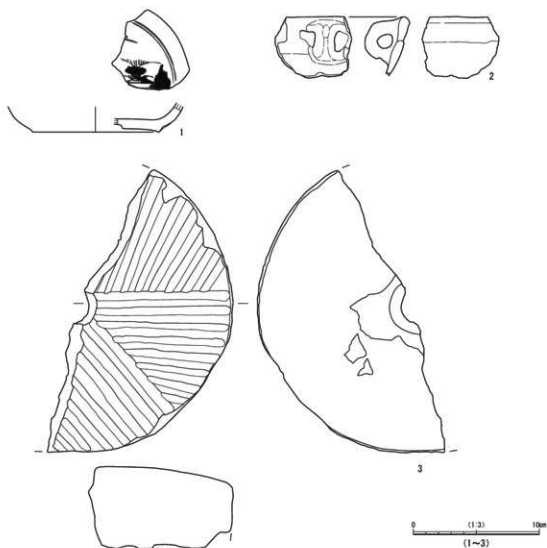
粘性弱い、しまりやや強い。
 粘性やや弱い、しまり強い、ローム(φ1~5mm)を少量含む。
 粘性弱い、しまりやや弱い、ローム(φ1~10mm)を多量含む。
 粘性弱い、しまりやや強い、ローム(φ1~10mm)を極多量含む。

SD1-SK3

1. 暗褐色土(10YR3/4)
2. 黒褐色土(10YR2/2)
3. 黄褐色土(10YR5/6)
4. 黒褐色土(10YR3/2)
5. 褐色土(10YR4/6)
6. 黄褐色土(10YR5/6)

粘性やや弱い、しまりやや強い、ローム(φ1~5mm)を微量含む。
 粘性やや弱い、しまりやや強い、ローム(φ1~5mm)を微量含む。
 粘性弱い、しまりやや弱い、ローム(φ1~10mm)を多量含む。
 粘性やや弱い、しまりやや強い、ローム(φ1~10mm)を微量含む。
 粘性やや弱い、しまりやや強い、ローム(φ1~5mm)を微量含む。
 粘性弱い、しまりやや弱い、ローム(φ1~10mm)を中量含む。

第7図 第1号溝跡(2)



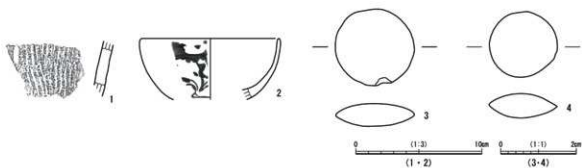
第8図 第1号溝跡出土遺物

表一3 第1号溝跡出土遺物観察表

番号	種別 器種	出土位置	法量 (cm)	遺存率 (%)	色調	胎土	焼成	文様・調整・技法
1	磁器 皿	SD1-SK1	口径：— 底径：(10.0) 器高：(2.0)	15	—	—	良好	三寸皿。柱状みに風磨が施される。底面は削り出し、 底の自然で輪割が行われる。肥前系。
2	土器 類聚	SD1-SK1	—	5 未満	にぶ・橙色 (5YR5/4)	白色砂子	良好	底面が丸みをもち根柢で、内耳は胴部から口縁にか けて取付けられる。胴部下半から非常に薄手である。
番号	種別 器種	出土位置	直径 (cm)	穿孔径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	備考
3	石製 透石I (TF1)	SD1-SK1	(26.0)	(3.0)	(6.4)	2663.7	欠損	砂引。約半分を欠損。また裏面が広く剥離している。 六分画で網痕数は7条である。溝跡辺り平面は非常に 平滑であるのに対し、溝は粗である。

第4節 遺構外出土遺物

可能な限り図化に努めたが、出土遺物は少ない。1は縄文土器で、第1次調査でも出土していた加曾利EⅡ式であろう。2は瀬戸美濃系磁器の中碗である。3・4は礫石状土製品である。



第9図 遺構外出土遺物

表一4 遺構外出土遺物観察表

番号	種別 器種	出土位置	法量 (cm)	遺存度 (%)	色調	胎土	焼成	文様・調整・技法
1	縄文土器 深鉢	B区	—	5 未満	にぶい・褐色 (7.5YR7/3)	白色粉子・石炭・小礫	良好	器底に縦筋文。縦位沈線と磨り消しがみられる。
2	磁器 碗	B区	口径：(10.9) 底径：— 器高：(4.8)	5 未満	—	—	良好	丸形の中碗で外面に草木が留まれる。輪脚に灰が留まる。
番号	器種	出土位置	長さ (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	備考
3	礫石状 土製品	A区	2.00	2.00	0.60	2.3	95	型押し。指紋が残る。
4	礫石状 土製品	A区	1.80	1.75	0.65	1.4	完形	型押し。指紋が残る。

第5章 まとめ

地蔵作遺跡の第2次調査では、縄文時代と推定される土坑3基・ビット1基、近世の溝跡1条を検出した。東側隣接地が第1次調査地点であり、第2次調査の成果はこれに連続する遺構と遺物の広がりと考えられる。

特に近世の溝跡は、土坑が平面数珠状に連なる特異な形態で注目される。ここでは、第1次調査で下総台地に展開した幕府官営の牧に準じる野馬堀ではないかと推測されたこの溝跡を取り上げて、まとめたい。

1 近世房総半島の牧

近世房総半島の牧に関する研究は、近年になって歴史学・考古学の両面から成果がまとめられている(千葉県教育振興財団編 2006、吉林 2008、犬塚 2008、近世史部会共同研究グループ 2023)。千葉県内におかれた近世の牧は、古代から中世の牧を母体にしたもので、下総の小金牧と佐倉牧、安房の嶺岡牧からなる。ただし、17世紀中頃まで牧の範囲ははっきりしない。考古学的な遺構として代表的な牧地を区画する野馬土手と堀の多くは、牧内で新田開発と検地が本格化する17世紀後半の延宝期(1673～1681)以降に設置され始めたと考えられ、宝永4年(1707)の火山灰が鍵層となることもある。18世紀前半の享保期(1716～1736)にも牧は改革の一環として整備され、明治維新で廃止されるまで存続した。文献や絵図から、牧を構成する遺構には馬の水飲み場や、道と牧が交わる場所に木戸の存在も推測されるが、確実な検出例は少ない。

一方、特に子馬を狙う狼や野犬の牧への侵入を防ぎ、害獣を駆除するために構築された落とし穴と考えられている「シシ穴(しし穴・獅子穴・猪穴)」、「犬落とし穴(犬落穴)」と呼ばれる大型の土坑が検出されている。文献資料では、このような落とし穴を維持管理する記録も残されているという。地蔵作遺跡で検出された土坑が平面数珠状に連なる溝跡の類例は、これらの遺構のなかに認められる。具体的には、次に示す通りである。

2 土坑が平面数珠状に連なる溝跡

(1) 飯積原山遺跡

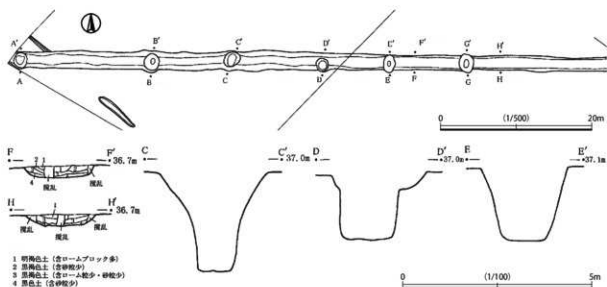
酒々井町に所在する。北に高崎川を望む標高36～39mの平坦な台地上に立地する。佐倉牧に属する柳沢牧の北端に位置し、遺構が集中する台地北側を囲むように大型の土坑が設置されていることから、これらが害獣の牧への進入を防ぐ役割を果たしていたと推測している(新田・平井編 2014、木原・沼澤・西川・橋本 2015)。

溝跡は、遺跡を横断するように東西方向に直線的に延びる。一部で硬化面が確認されたため、道路状遺構とも記載されている。規模は、長さ520m以上、幅1.5～3.7m、深さ0.3～0.8mである。遺物は近世の陶磁器が少し出土している。

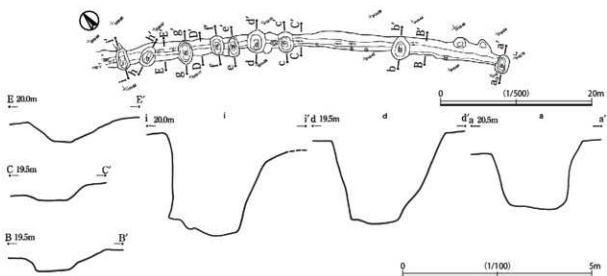
土坑は13基以上が断続的にある。土坑の平面形態は円形ないし楕円形である。土坑の長軸が溝の走行方向と直交して平面数珠状となる。規模は、長軸約3.0m、短軸約1.2m、深さ1.5～2.7mである。覆土は全体的にしまりがなく、ロームブロックを多く含み、人為的な埋め土と指摘されている。

(2) 市野谷宮後遺跡

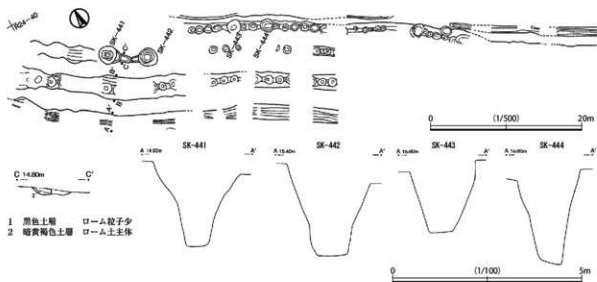
流山市に所在する。標高約23mの坂川の支流最奥部の舌状台地に立地する。遺跡周辺は小金牧に属する上野牧にあたる。大型の土坑は、南北の谷津頭をつなぐように設置され、分水嶺を遮断することで、耕作地や村落への害獣の侵入を防いだものと考えられている(安井・蜂屋編 2023)。



(1) 飯積原山遺跡



(2) 市野谷宮後遺跡



(3) 富士見遺跡

第10図 土坑が平面数珠状に連なる溝跡

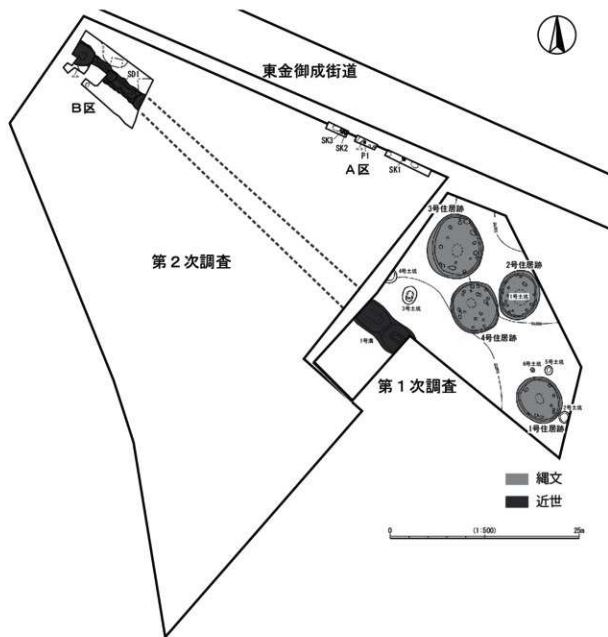
溝跡の規模は、長さ143m以上、幅0.7～3.0m、深さ0.5～0.7mである。遺構の時期を示す遺物は出土していない。

土坑は45基以上が断続ないし、かなり近接してある。平面形態は楕円形である。長軸が溝の走行方向と直交して平面数珠状となる。規模は長軸平均3.0m、短軸平均2.3m、深さ平均2.4mである。覆土はロームブロックを多く含むまりが弱く、人為的な埋め土と考えられている。遺物は馬の歯が出土している。

同じ流山市内では、市野谷芋久保遺跡や西初石五丁目遺跡（森本・新田・山岡・平井2015）、トレンチの調査による市野谷立野遺跡（平井編2019）、大群中ノ割遺跡でも類似した遺構が検出されている（萩原2021）。大群中ノ割遺跡では、大型土坑が牧で死んだ馬を埋葬するのに転用されたと指摘されている。

（3）富士見遺跡

柏市に所在する。標高16～18mの利根川南岸の河岸台地先端に立地する。遺跡の南端に沿って検出され



第11図 遺構変遷図

た5列に及ぶ堀や溝跡は南端境界溝群と報告され、復元図から小金牧に属する高田台牧の北端に位置すると考えられている。したがって、この溝跡は畑地の開発に伴う牧との区割であり、大型の土坑も伴うことから、同時に害獣対策でもあったと推定されている(山口編 2015)。

溝跡は、東西から入る浅い谷によってえぐれるように狭くなっており、そこを締め切るように5条の溝が並列して直線状に走る。このうち2条の溝底に大型の土坑や円形ピットが断続ないし近接して設置されている。規模は、長さ約120m以上、幅約15m、深さ約0.5mである。遺物は19世紀代の陶磁器が出土している。

土坑は7基以上である。土坑の平面形態は円形ないし楕円形である。長軸が溝の走行方向と直交して平面数珠状となる。規模は長軸1.1～2.5m、短軸0.9～2.3m、深さ1.3～2.5mである。覆土の状況は不明のものが多い。遺物は馬の歯が出土している。

3 地蔵作遺跡の溝跡

地蔵作遺跡は千葉市に所在し、標高23～24mの花見川右岸の舌状台地に立地する。第1・2次調査で検出された溝跡は、北西から南東に走る。規模は、長さ推定58m以上、幅1.8～3.2m、深さ約0.3mである。土坑は5基以上が断続してある。土坑の平面形態は円形ないし方形である。長軸が溝の走行方向と直交して平面数珠状となる。規模は長軸1.3～3.5m、短軸1.2～3.2m、深さ2.6～3.0mである。覆土は全体的にしまりがなく、ロームブロックを多く含み、人為的な埋め土と思われる。遺物は近世の陶磁器が出土している。

大型の土坑が設置されている間隔に注目して、土坑が平面数珠状に連なる溝跡の類例をみると、地蔵作遺跡の溝跡は市野宮後遺跡をはじめとする流山市内の事例に類似する。地蔵作遺跡周辺に牧が知られていないことから、これらの遺構は畑地の開発に伴う区画溝であり、大型の土坑がその害獣対策であったと考えておきたい。

今回一部を例示したように、野馬土手に伴う溝状の堀には、円形ピットや、大型の土坑が掘削されるような例も多い。これらの機能は柵列や害獣駆除と想定されてきたが、いまだ集成に基づく比較検討は十分に尽くされていないように思われる。縄文時代の落とし穴とも類似する断面V字状の大型土坑群とも併せて(橋本編 1989、落合・雨宮 1999、猪俣・土屋編 2000 など)、牧に関わるこれら遺構の総合的な理解は今後の課題であろう。

参考文献(刊行年順)

- 橋本勝雄編 1989『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅸ』(千葉県文化財センター調査報告 164)
 荒井英樹編 1997『地蔵作遺跡』地蔵作遺跡発掘調査報告
 落合章雄・雨宮龍太郎 1999『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ』(千葉県文化財センター調査報告書 352)
 栗原昭吾・土屋剛一郎編 2000『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書6』(千葉県文化財センター調査報告 389)
 千葉県教育振興財団編 2006『房総の近世牧跡』千葉県教育委員会
 吉林昌寿 2008『考古学から見た下総近世牧』『牧の考古学』高志書院: 211-221
 大塚俊雄 2008『房総の近世牧跡の調査』『日本歴史』718 日本歴史学会: 92-101
 新田浩三・平井真紀子編 2014『酒々井町飯積原山遺跡1 旧石器時代 奈良時代～中・近世編一酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書2-1』(千葉県教育振興財団調査報告 726)
 森本和男・新田浩三・山岡磨由子・平井真紀子 2015『流山新市街地区埋蔵文化財調査報告書7』(千葉県教育振興財団調査報告 735)
 山口典典編 2015『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書7-柏市富士見遺跡一縄文時代以降編2』(千葉県教育振興財団調査報告 736)
 木原高弘・沼澤豊・西川博孝・橋本勝雄 2015『飯積上台遺跡2・飯積原山遺跡3・柳沢牧馬土手遺跡馬土手一酒々井南部地区埋蔵文化財発掘調査報告書4-1』(千葉県教育振興財団調査報告 738)
 平井真紀子編 2019『流山新市街地区埋蔵文化財調査報告書11-流山市市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・西初石玉丁目遺跡・市野谷駒木野馬土手・十太夫野馬土手一』(千葉県教育振興財団調査報告 779)
 萩原恭一 2021『近世の牧とウマの埋葬』『研究連絡誌』85: 2635-2642
 安井健一・蜂屋孝之編 2023『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書8-流山市市野谷宮後遺跡(北側)・三輪野山野馬土手・市野谷平久保遺跡(14)〔縄文時代以降編〕-1』(千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告 44)
 近世史学会共同研究グループ 2023『「房総の牧」研究の現在地』『千葉史学』82 千葉歴史学会: 30-40

写 真 图 版



遺跡遠景（東から）



遺跡全景（南から）



A区全景（南から）



A区遺構確認状況（南から）



SK1 (東から)



SK1 断面 (西から)



SK2 (東から)



SK2 断面 (西から)



SK3 (東から)



SK3 断面 (西から)



P1 (東から)



P1 断面 (東から)



B区全景（南から）



B区遺構確認状況（南から）



SD1 遺構確認状況 (1) (東から)



SD1 遺構確認状況 (2) (東から)

SD1-SK1 断面 (東から)



SD1-SK2 断面 (東から)



SD1-SK3 断面 (西から)





出土遺物

抄 録

ふりがな	ちぼしじぞうさくいせき							
書名	千葉市地蔵作遺跡							
副書名	店舗建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	坂下貴則							
編集機関	株式会社東京航業研究所							
所在地	〒350-0855 埼玉県越市伊佐沼 28-1							
発行日	2024（令和6年）5月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
地蔵作遺跡	ちぼしじぞうさくいせき 千葉県千葉市 花見川区長作町 959-1、1265-1、 同3	12102	花見川区 -№.35	35° 40' 57"	140° 04' 27"	2023.8.28 ～ 2023.9.29	102㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
地蔵作遺跡	集落	縄文	土坑 ピット		3基 1基	なし		—
		近世	溝跡		1条	陶磁器・焙烙・石臼		土坑が平面数珠状に連なる溝跡
要 約	<p>地蔵作遺跡は、花見川右岸の舌状台地に立地する。第2次調査では、縄文時代と推定される土坑3基・ピット1基と、近世の溝跡1条を検出した。</p> <p>近世の溝跡は、第1次調査で検出された溝跡の延長上に位置する。土坑が平面数珠状に連なる形態的特徴も類似することから、同じ遺構の広がりと考えられる。房総半島の牧に関連する遺構との比較から、この溝跡は畑地の開発に伴う区画溝であり、付属する大型の土坑がその吉獣対策であったと推定した。</p>							

千葉市地蔵作遺跡（第2次）

—店舗建設に伴う発掘調査報告書—

2024（令和6）年5月31日 発行

編 集 株式会社東京航業研究所
〒350-0855 埼玉県川越市大字伊佐沼 28-1
TEL 049-222-5771

発 行 千葉市教育委員会
〒260-8722 千葉県千葉市中央区千葉港 1-1
TEL 043-245-5962（生涯学習部文化財課）

印 刷 関東図書株式会社
〒336-0021 埼玉県さいたま市南区別所 3-1-10
TEL 048-862-2901